1 国立民族学博物館における芸能の映像記録作成と活用

① 国立民族学博物館と映像

国立民族学博物館（民博）は 1974 年に大学共同利用機関として設置され，1977 年，大阪万博の跡地の万博記念公園の中に博物館を開館しました。文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに，民族資料を収集・公開し，世界の諸民族の社会と文化についての認識と理解を深めることを目的としています。2004 年には，国立大学の法人化とともに大学共同利用機関法人として新たに位置づけられ，人間文化研究機構を構成する一機関となりました。

民博は，開館当初から映像を重要な資料と位置づけ，スタジオ，映像機器，スタッフを揃え，独自の映像製作を続けてきました。私たちは，2010 年 3 月に民博の音楽展示を一新し，2021 年にはその若干の手直しもおこないましたが，そこでも映像を重要な資料として位置づけた展示をおこなっています。人間がどのように楽器を奏でるかは，モノの展示だけでは伝えることができません。私たちは，楽器が生み出す音楽の多様性を伝えるために，資料の収集にあわせて，多くの地域で映像を撮影し，ほぼすべてのコーナーで，展示した楽器の演奏を映像で見られるようにしました（福岡 2013）。

② カンボジアの影絵芝居の映像記録

映像の重要性は展示だけにとどまりません。カンボジアの影絵芝居を例に，文化遺産の継承に映像を役立てる可能性について考えてみましょう。

(1) 大型影絵芝居スバエク・トム

スバエク・トムは，大型の人形とスクリーンを用いる影絵芝居です。ヤシ殻に灯した炎で大きなスクリーンに影を投影します。一辺が 60cm から 150cm 程度のウシの革に，物語の一場面を彫り込んだもの，および人形を用います。ここでは便宜的にどちらも「人形」と呼びます。

写真①　幕の前で人形を遣う（2000 年 3 月）

人形を操る演者は，スクリーンの裏側だけでなく表側にも現れて演じます。白いスクリーンの前では，革に彫られた物語の場面と演者のシルエットがくっきりと浮かび上がり，演者の舞踊的な身のこなしも見せ所になります。

スバエク・トムはインド起源の長大な叙事詩であるラーマーヤナを題材としています。ピン・ピアットとよばれる伝統的な音楽アンサンブルが伴奏として用いられます。上演の要を成すのは，歌うような語りで，一座のリーダーがつとめます。かつては，高い位の僧の火葬儀礼等で演じられたと言われ，スバエク・トムは儀礼的な意味をもっていたと考えられます。スバエク・トムは，ユネスコの無形文化遺産の代表一覧表に記載されました。現在ではカンボジアを代表する芸能ということができるでしょう。

(2) 伝承の中断と復興

スバエク・トムは，カンボジアのシエムリアップに伝えられています。1970 年代初頭，カンボ

ジア諸派の争いが激しくなり内戦を心配した人々は，スバエク・トムの人形をシエムリアップからプノンペンに疎開させました。その後のポル・ポト派の支配や内戦により，1970年代から90年代にかけて，スバエク・トムを上演することができませんでした。また，多くの演者がこの時代に亡くなりました。

1990年代に入り，ようやくカンボジアの和平が実現し，シエムリアップにおいて復興の努力が始まりました。復興の中心になったのは，一座のリーダーをつとめた，ティー・チアンさん（1922-2000）です。しかし私たちがお会いした1999年には，彼は高齢で，体調が思わしくありませんでした。しかし，語りの役やリーダーとして儀礼を取り仕切る役を引き継げる若者は，まだいませんでした。

(3) 映像記録の作成

1999年暮れ，私たちは伝統芸能を映像で記録するためにカンボジアを訪れました。このとき，ティー・チアンさんを紹介し，また通訳をつとめてくださったのは福富友子さんです。彼女はティー・チアンさんに弟子入りし，スバエク・トムを学ぶとともにグループを様々な形で支えていました。彼女を始めとする多くの関係者は，彼が元気なうちに，彼の語りの名人芸を中心とした上演を記録しておかなくてはならないと考えていました。

私たちはスバエク・トムを本格的に記録するため，2000年春，国際交流基金の助成を受けて，再度カンボジアを訪れ，昔ながらの7晩連続の上演を記録しました。さらに，ティー・チアンさんがどのようにスバエク・トムを学び，演じてきたかを語ったインタビュー，元情報文化大臣のチェン・ポンさん（1930-2016）を始めとする関係者のインタビューなども収録しました。その年の夏，残念ながらティー・チアンさんは亡くなりました。精霊の思し召しだからと言って，病院に行くことを拒み自宅で息を引き取ったそうです。

私たちが撮影した映像は，貴重な記録となりました。しかし，記録を残すことは芸能を伝えることに結びつくのでしょうか。

芸能の映像記録は，人類の創造性の記録として重要です。しかし，芸能を映像に収めたからといって，芸能そのものを残したことにはなりません。生の上演を見る代わりにこの映像を見ることになっては本末転倒です。伝統は，人から人へと伝えられていくところにこそ意味があります。映像を伝統芸能の保護に役立てたいと考えるなら，こうした伝承の過程に映像を活かす方策を考える必要があります。

(4) 映像公開の模索

広くこの映像を公開すべきであることは間違いありませんが，公開が芸の「盗用」に結びつくと受け取られることもあります。ティー・チアンさんは，きちんと芸を学ばずに表面的にまねされることをきらい，自分の語りを文字に残すことは避けていたそうです。そうした考え方は，しばしばその芸能を支える価値観や信仰と結びついていますので，簡単にそうした考え方を否定することはできないでしょう。

もちろん，ティー・チアンさんが，昔ながらの上演で全てのレパートリーを演じたのは，スバエク・トムを継ぐ次代の人々に見てほしかったからだろうと思います。2009年には，一座を継いだ人びとを対象に小さな上映会を開催して彼らの考え方を探りました。

一座のリーダーを引き継いだのは，ティー・チアンさんの孫，チアン・ソパーンさんです。彼と一座の中心メンバーは，2000年にはティー・チアンさんの指導で人形を遣う若手でした。基本的な動きのデモンストレーション映像に対して，「今ならもっときちんとできる」という声が聞こえる一方，上演に関しては「あの時の方が上手だったんじゃないか?」と言う者もいました。また，ティー・チアンさんのインタビュー映像から，彼のスバエク・トムへの思いの深さを知り，「やはりきちんと伝えていかなければ」という決意も表明されました。

映像は，必ずしも，芸を伝え学ぶためのお手本としての役割を果たすばかりではありません。上映会は，自分たちの芸を振り返り，スバエク・トムを見つめなおす良い機会になったようです。スバエク・トムを盛りたてていくためのアイディアも次々と出されました。その一つは，この映像番組のクメール語版を作って，カンボジアでももっと多くの人，特に子どもたちに見てもらおうというものです。それを受けて，その後，私たちはクメール語版の映像番組も作りました。

映像記録は，様々な工夫のきっかけを与えることができます。私は，この上映会を通じて，映像記録を芸能の伝承のプロセスに位置づけて役立てることの可能性を学びました。ちなみに，私たちは現在，全 7 エピソードの語りを書き起こし，英語の翻訳をつけたものの出版を準備中です。上演の映像記録は全部で 16 時間分くらいあります。これら全部を通して見ることは現実的には難しいと思います。語りを書き起こし，ビデオのタイムコードを添えることで，見たい部分に簡単にアクセスできるようにしたいと考えています。

3 フォーラム型情報ミュージアム

私は，民博が現在進めているフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトの中で，徳之島の民俗芸能の映像記録を中心としたコンテンツの作成にもたずさわりました。次にその考え方についてご紹介します。

(1) フォーラムとしての博物館

「フォーラム」とは，博物館の一つのあり方を示す概念として，吉田憲司らによって積極的に使われてきた考え方です。博物館は，すでに価値の定まったものを展示し，それに関する知識を一方的に与えるような場ではなく，フォーラムとして議論を交わし，新しい知識や見方を生みだしていく場所であるという考え方です（吉田 1999：216-226）。

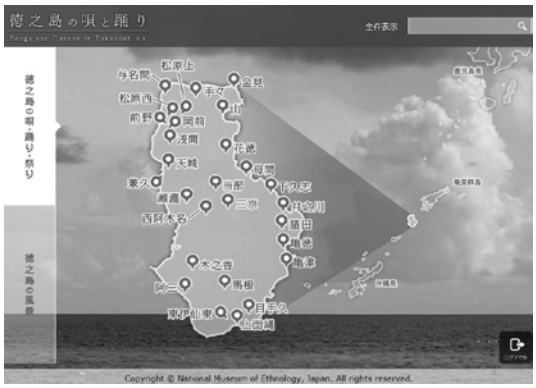
民博は，この考え方に沿って，2008 年から 10 年弱をかけて，全館の展示を刷新しました。そして，2014 年からは展示だけでなく，デジタルデータを活用した資料情報の生成・発信においてもこの考え方を取り入れ，「フォーラム型情報ミュージアム」を構築するプロジェクトを開始しました。

(2) フォーラム型情報ミュージアムが目指すもの

フォーラム型情報ミュージアムは，一言で言うと「フォーラム機能をもつ国際的な共同利用データバンク」と言うことができます。その第一の目標は，世界各地の研究機関や博物館等に分散する文化資源についての情報の窓となることです。一つの研究機関や博物館が所蔵できる資料には限りがあります。そこで，特定のテーマや対象に関する資料の国際的な情報ネットワークを構築し，相互の資料を関連づけて知見を広げることのできるデータバンクを目指しています。

第二の目標は，文化伝承者や研究者ら，異なる立場からの知見を重ね合わせて新しい知識を生成することです。同じ資料についても，文化伝承者がもつ知見と研究者がもつ知見は，必ずしも同じではありません。さまざまな視点を重ね合わせることで，異なる見方を知り，多面的に対象を理解することができるのではないでしょうか。そのためには，単に既存の情報を提供するだけではなく，フォーラムとして情報を交換し，議論をおこなうための仕組みをそなえることが必要です。

そして第三の目標は，グローバル化する世界において文化を伝承あるいは創造する場を提供することです。今日，さまざまな事情で文化の継承が危ぶまれるケースが世界各地でみられています。文化的な遺産を伝え，引き継ぎたいという意志があるにも関わらず，社会的な条件により継承に困難が伴う場合やすでに断絶がおこってしまった場合，博物館や研究機関がもつ資料や情報が役立つことがあります。資料をお手本にして，伝承の再興や文化の再構築をはかったり，自分たちの祖先が作ったものやその姿を見ることで，大きな刺激を受けたりする例はよく見られます。そうした意味において，フォーラム型情報ミュージアムは文



写真② 「徳之島の唄と踊り」のメニュー画面。地図をクリックするとその集落のビデオを見ることができる

化を伝承あるいは創造する場を提供するということを目標にしています。

(3) 徳之島の唄と踊り

私たちは，2010 年から 2016 年まで，徳之島の各集落の芸能の映像記録作成に取り組みました。それらの映像がフォーラム型情報ミュージアム「徳之島の唄と踊り」の素材となっています。そこでは，徳之島の 28 集落，延べ 250 曲ほどの芸能のビデオをインタラクティブに視聴することができます。さらにコメントを加える機能を備え，制作者と利用者，利用者同士のあいだでの情報交換をおこなうことができるように設計されています。

私は「徳之島の唄と踊り」の目標を次の二つにおいています。一つは，徳之島各集落の芸能を概観できるようにすること，もう一つは，徳之島の芸能について議論する場を提供することです。

もちろん，お手本ビデオとしての役割も大切です。しかし，徳之島のある小学校の先生にも言われましたが，映像が，年長者から直接学ぶ機会を奪ってしまえば本末転倒です。教えることのできる経験者が健在なうちは，映像はあくまでも補助的な利用と考える方が適切だと思われます。むしろ，映像によって近隣の集落の芸能を知ることが，自分たちの芸能との比較において，新たな発見をもたらしてくれることもあり，有効ではないかと考えられます。徳之島は歌や踊りが盛んな島ですが，同じ時期に各集落で行事をおこなうため，近隣の集落の芸能やその状況については，案外知られていないそうです。

また，徳之島町の比較的規模も大きく，芸能も盛んな集落の方が次のように言っていたことがありました。

「現在は，何とか芸能を維持することができている。しかし，将来，人口が減り続け，小学校が統合されれば，複数の集落が一緒になって行事や芸能をおこなわなければならなくなるだろう。今からその可能性を考えて準備しておかなければならない。」

将来，どのような状況になるにせよ，徳之島では，自分たちの集落の芸能の将来を考える上でも，他の集落の芸能を知ることは大事だということが言えそうです。その上で，芸能についての理解を深めていく議論を重ねることが，不可欠になっていくと思われます。そのような議論の場を提供し，様々な知見を蓄積していくことは，徳之島で芸能を継承していく人々にとっても，現代の日本の社会における芸能のあり方を考える研究者にとっても意義あることではないかと思います。議論を喚起するものとして，地元の人びとと一緒に「徳之島の唄と踊り」を活用していきたいと考えています。

【参考文献】

福岡正太，2013，「民博と音楽」『HUMAN―知の森へのいざない』4，東京：平凡社，pp.116-121。
吉田憲司，1999，『文化の「発見」―驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

（福岡正太）